

2019. 10. 2 (水)

みんなのための Mastery for Service —大上段に構えずに

打 樋 啓 史

過越祭の前のことである。夕食のときであった。イエスは、父がすべてを御自分の手にゆだねられたこと、また、御自分が神のもとから来て、神のもとに帰ろうとしていることを悟り、食事の席から立ち上がって上着を脱ぎ、手ぬぐいを取って腰にまとわれた。それから、たらいに水をくんで弟子たちの足を洗い、腰にまとった手ぬぐいでふき始められた。ペトロが、「わたしの足など、決して洗わないでください」と言うと、イエスは、「もしわたしがあなたを洗わないなら、あなたはわたしと何のかかわりもないことになる」と答えられた。さて、イエスは、弟子たちの足を洗ってしまうと、上着を着て、再び席に着いて言われた。「わたしがあなたがたにしたことが分かるか。主であり、師であるわたしがあなたがたの足を洗ったのだから、あなたがたも互いに足を洗い合わなければならない。わたしがあなたがたにしたとおりに、あなたがたもするようにと、模範を示したのである。」(ヨハネによる福音書 13 章 1-15 節より)

スクールモットーへの苦手意識

今年、関西学院は創立 130 周年、また上ヶ原キャンパスに移転して 90 周年という節目の年になります。そこで、社会学部のチャペルアワーでもスクールモットーである「Mastery for Service」をもう一度見直してみようという意図でこのシリーズを行っています。

皆さん、「Mastery for Service」と何回も聞いていると思いますが、これはご存じのように 4 代目院長のベーツ先生というカナダ人の宣教師が提唱した言葉です。もともとベーツ先生はカナダのモンリオールにある

マギル大学で学ばれ、その法学部で使われていた言葉であったそうです。「奉仕のための練達」と日本語では訳されますが、隣人や社会や世界に仕えるために自分を鍛える、自分を成長させるという関学人のあり方を示す言葉として皆さんも親しんでいると思います。

皆さんはこのスクールモットーについてどのように感じ、これをどのように受け取っているでしょうか。私は中学部で関西学院に入学し、大学では 2 つの学部で学び、大学院にも進み、教員もしているので、人生のほとんどを関学で過ごしてきました。ですからもちろん、「Mastery for Service」という言葉が好きだし、愛着もあるし、他の学校には

ない良いモットーだと思います。でも同時に、特に若い中高生や大学生の頃、スクールモットー的なものは正直言うと苦手でした。大体スクールモットーでは高尚なことが謳われるので、そういうのを聞くと引け目を感じるタイプの人間だったのです。

もちろんスクールモットーが掲げる高い理想を目標にして努力するのは大切なことです。しかし、中高生時代の私は、自分などたいした者でもないし、よく悪いことをして先生には怒られるし、勉強や部活もそれなりにやってるけどいまいちパツとしないというコンプレックスを持って生きていたので、『Mastery for Service』はきれいな言葉だけけど、自分には関係ない。もっと優秀でがんばっている生徒たちのための標語なんじゃないのか」と少し斜めに見るような感じでした。

ヨハネ福音書の「洗足物語」

そのように私は若い頃スクールモットーについてどちらかと言えばネガティブな印象をもっており、今皆さんの中に同じように感じている人がいるかもしれません。しかし教員になってから、「Mastery for Service」について少し違う視点から考えるようになりました。教員になって今年で21年目なのですが、その立場で「Mastery for Service」について色々と考えたり語ったりする中で、「これは決して一部の優れた人たちや特別にがんばっている学生だけのためのものではなくて、すべての学生にとって身近で、皆がそれぞれの形で実践できる普遍性をもったスクールモットーなのではないか」と考えるようになったのです。

そう考えるようになったきっかけが、実は今日読んだ聖書箇所、ヨハネによる福音書の物語でした。「Mastery for Service」について調べていたとき、このモットーには聖書的にいくつかの起源があり、その一つとしてこのヨハネ福音書の物語があることを知りました。イエスが弟子たちの足を洗う場面です。「足を洗う」と言えば、「ギャンブルから足を洗う」など悪弊を絶つときに使いますが、これはイエスが本当に文字通り弟子たちの足を洗う場面で、「洗足物語」という名で知られています。

最初のところで「イエスが神のもとに帰るときが来た」と言われていましたが、どういう場面かと言うと、皆さんよくご存じのレオナルド・ダビンチの絵画にもなっている「最後の晩餐」です。イエスはこの翌日十字架の上で殺されるのですが、そのことをイエスは予知しており、その前夜に弟子たちと最後のお別れの食事をした。それが「最後の晩餐」です。その晩餐が終わった後、イエスはおもむろにたらいに水をくんできて弟子たちの足を洗い始めた、という不思議なことが書かれています。

弟子のリーダーであったペトロは、イエスが自分の足を洗おうとするのを拒みますが、イエスは「あなたの足を洗わないと、私とあなたは何の関わりもないことになる」と言います。そうして、全員の足を洗い終わると、イエスは弟子たちに、「私は今あなたたちの足を洗った。これは模範を示したのだ。あなたたちもこれからお互いに足を洗い合ってください」と締めくくります。

なぜイエスは死ぬ前の日の夜にこんなことをしたのか、また言ったのか。自分がもう死ぬことを自覚した上で、最後の最後に弟子た

ちの足をあえて洗い、「互いに足を洗い合いなさい」と言い残した。ということは、これは言わばイエスの遺言です。では、イエスは最後の最後に何を伝えたかったのか、これが「Mastery for Service」に関係してくるので考えてみたいのですが、まず「足を洗う」という行為には意味がありました。1世紀にユダヤ人が「足を洗う」ということを日常的にお互い行っていたかという、そうではなかったようです。これはある特定の人しかやらなかった。誰かと言うと奴隷です。「奴隷」というときつい表現になるかもしれませんが、お金持ちの家には召使が雇われていて、そういう人たちが色々な仕事をする中で、主人の足を洗ったのです。人々は裸足にサンダルを履いて歩く生活だったので、家に帰ると足が汚れていました。そのサンダルの紐を解いて、たらいに水をくんで主人の足を洗うというのは、召使・僕・奴隷の仕事だったので

す。それを先生であるイエスが自分にやろうとしたので、ペトロがびっくりして「やめてください！」と言ったのもよくわかります。でもイエスが「洗わせてくれ」と言ってあえて弟子たちにそうしたことで、象徴的に何か伝えられています。それは、「イエスは仕えるために生きてきた」ということです。イエスは「先生・師」または「主」と呼ばれていましたが、自分は「先生・主」として皆に仕えさせたり、皆をコントロールしたりするために生きてきたのではなくて、弟子たちをはじめ人々に仕えるために生きてきた、そのことを大切にしてきたのだ、と伝えているのです。

福音書ではそのようなイエスの人生の締めくくりとして十字架の死があるという描き方

になっているのですが、そういう自分の生きる姿勢をイエスはここで象徴的な行為によって示すのです。そして、「あなたたちもお互いに足を洗い合いなさい」というのは、「お互いに仕え合っていくなさい」ということです。

皆が人の上に立とうとして、人より得しようとして、人をコントロールしようとして、少しでも富や権力や名声を得ようとして躍起になっているけれども、本当に尊いのはそういうことではなくて、人を大切に誰かのために自分ができることを行なうこと、それに尽きるのだということ。す。「足を洗う」というのは、それを象徴的に示す行為だったので。「そういう社会を作っていくなさいよ」ということをイエスはそのような行為で示しているのです。

「Mastery for Service」に重ねれば、先ほどから言ってきた「仕える」ということが、まさに「Service」です。「Mastery」というのはイエスが「先生・師」とか「主」と呼ばれていたことに関係があります。イエスは大切なことを語り、行い、人々に救いを与えたり、励ましたりして、人々に影響を与えました。しかし、その「Mastery」は自分の名声のためではなくて、仕えるためなのだということを、「足を洗う」という行為で示し、それを弟子たちにも勧めたのです。その意味で、この物語が「Mastery for Service」の起源になっていると言われます。

「足を洗うこと」のもう一つの意味

ところで、「足を洗う」という行為にはもう一つ意味があると思います。「足」とは体の中でどういう部位ですか？「体の中で足は

もっとも〇〇な部分だ」と言うなら、「〇〇」には何が入りますか？歩き疲れて家に帰って部屋で靴下脱いだ時のことを想像するのもなんですが（笑）、とにかく足というのは「にこい」ますよね。つまり、体の中で一番汚れて疲れているところなのです。私たちは足によって体を支えて大地に立って動いて生きているわけですから、足とは体の中でもっとも疲れているところであり、もっとも痛んでいるところであり、ごみやほこりも足に全部たまるからにおいもします。そういう意味で、足とは体の中で最も疲れていて汚れているところなのです。

実際の足もそうですが、聖書の中で「足」と言うときには象徴的な意味があります。要するに、私たちの中で内面的に最も疲れていたり、痛んでいたり、汚れているところ、一番不安で傷ついているところ、自分の中の深い影や闇になっているところ、「足」という言葉にはそういう意味も重ねられていると言えるでしょう。

イエスはそこを洗わせてほしいと言ったのです。「あなたのうまくいっているところとか自信満々なところ、それはそれでいい。けれども、あなたの中でうまくいっていないところ、もう嫌だ、隠しておきたい、こんな過去はなくなってほしい、このことが一番不安だというところ、そこに私は触れたい。そこであなたとかかわりたい。」そう言っているというふうにも読めるのです。

「お互いに足を洗い合いなさい」というのもそういう意味があると考えられます。つまりお互いに弱い部分や傷ついた部分、痛んでいる部分、不安な部分、一番人に見せたくない部分でかかわっていきなさいということです。そこでお互いにつながっていきなさいと

いうことです。

もちろん足に象徴される自分の闇や影や痛みや傷、そんなものを全部見せる必要はないし、見せたくないこともあるだろうし、お互いそんなことを全部見せ合いながら生きていたら人間関係は成り立たないでしょう。無理してそうしなさいと言っているわけではありません。むしろ、弱さや闇を持った自分として、「それでいい。大丈夫なんだ」ということです。人は誰しもそういう部分を持っている。お互いにそういう部分を持っている。だから、そういう自分として安心して相手の前に立てるといえることです。

SNSをやっていたら分かるけど、あれは「ドヤ顔の世界」「自慢大会」という傾向が強いですね。そういうところでは見えませんが、皆そんなことをやりながら実は闇を持っていたり傷を抱えていたり、どうしようもない部分を持っていたりするんじゃないでしょうか。「それこそが人間だ」というのが聖書の人間理解です。「互いに足を洗う」とはそういう人間同士としてお互いにかかわっていきなさいということです。

自分の弱さや悩みを誰かに打ち明けたいかなることがあるかもしれません。または誰かが打ち明けてくることもあります。そういうときには耳を傾け合って、支え合えたらいいですね。そうすればギスギスした足の引っ張り合いの競争社会とは違うコミュニティのようなものが生まれてくるのではないかと。イエスは多分そういうものを目指していたと思うのです。イエスが宣べ伝えた「神の国」とはそういうことだと思ふのです。そこには温かくて潤いのある、けれども当時にとっても確かで強固な人間関係が可能になってくるのではないかと思います。

この聖書の箇所が「Mastery for Service」の起源だとしたら、こう言えるのではないのでしょうか。「Mastery for Service」というとき、もちろん「Mastery」、つまり自分を鍛えて成長し、強い自分としてサービスする・仕えるということも大事です。しかし人間それだけではありません。自分の弱さ、傷や痛み、つらい体験も実は「Mastery」の一部なのだということです。それも「Mastery」の一部として、そのことを通して人に仕えることができる。そういう体験を経てこそわかることがあるはずです。それを通してこそ、人の痛みが理解できたり、人の話を聞こうと思えたりするのではないのでしょうか。

スクールモットーについて語られるとき、高尚な強さの面ばかりが強調されて、そこが抜け落ちているとしばしば感じさせられます。ですから、今日はこんな話をしてみようと思いました。皆「こんな自分なんか…」と書いていても、実はそこにこそ「Mastery」があるかもしれないということをぜひ分かち合いたいと思ったのです。

ある卒業生の Mastery for Service

最後に、1人の卒業生の話をします。彼は今30代の後半です。私は関西学院に就職する前、4年間ある教会の牧師をしていたのですが、彼はその頃中学生でその教会の教会学校に来ていました。私は教会の敷地内の牧師館に住んでいたのですが、彼とその兄弟や友人たちはしょっちゅう教会にやってきて、一緒に卓球したりご飯食べたり仲良くしていたのです。彼は高校に進んだ後、関西学院大学に入学しました。「学生時代は不真面目だっ

たので先生には近寄りなかった」と笑いながら言っていました。それなりにずっとつながっていて、卒業してからよく飲みに行ったりするようになり、今もずっと親しくしています。

彼は人当たりもよく好人物なのですが、私の中ではどちらかと言うと、「シャーシャーと生きているタイプ」という印象がありました。世渡り上手で頭もよく、得しながらうまく生きていくという印象です。もちろん、それが悪いというわけではありません。

ところが、その彼の人生に劇的な転機が訪れます。ずいぶん前ですが、彼が「先生、脳外科に入院していて手術を受けることになりました」と連絡してきました。お見舞いに行っただ話を聞いたら、こういうことでした。「自分は寝ている間にときどき痙攣を起こしたことがあって、調べてみたら脳の血管に問題があり、何事もなければ普通に元気に暮らせるけれど、何かが起こったときに脳の血管が破裂するような爆弾を抱えているとわかった。手術をしてそれを治したら破裂することは回避できる。けれどもその手術によって何か麻痺が残る可能性が、低いけれどもある、と言われた。でも自分は手術を受けることにした。」

「可能性は低いというから大丈夫だろうけど、無事であるように」と言って私は帰ってきたのですが、手術の後に連絡があり、「麻痺が残った」と聞き、愕然としました。体の右半分が麻痺した状態でリハビリをしていくというのです。最初は自由に動けなくて、今までできたことが全部できなくなりました。かなりの年月がたって、杖なしで、少し不自然さは残るものの左手ですべてやれるようになって、右手もある程度使えるようになって

て、一見したところわからないところまで回復しました。

しかしいずれにしても、彼は手術の前まで当たり前前にできていたことができなくなるといっても重く辛い体験をしました。職場にはそのまま残ることができ仕事を続けていますが、日常的に多くを喪失することになったのです。ところが、そのような経験を通して彼は変わったと思います。もともと人付き合いがよく愛すべき人物だったのですが、本当に「人に仕える」人間になったと私は思っています。彼はもともとクリスチャンで教会にも行っているのですが、教会やその関係者で問題を抱えている若い子たちのことを心をかけて色んなことを試みるようになりました。引きこもっている若者を訪ね、その子たちが彼に心を開いて外に出ていくようになったり、そういう子たちを集めて食事をしたり、一緒に旅をしたり、色んな弱さやしんどさを抱えた若者たちをつないでいくようなことを、一生懸命やって、とてもいい働きをしているのです。

私は「Mastery for Service」とはこういうことなのではないかと思っています。ある日、彼と一緒に飲んでいたら、「自分がと

ても痛くてつらい、失う体験を通して、今まで見えていなかったものが初めて見えた」という話をしてくれました。彼はそこで見えてきたことに精一杯取り組もうとしているのです。この卒業生のように、痛みを経験し、失うことを通して、人に仕えるようになっていく。人間にはそれが可能であり、それはとても美しい真実です。彼の実践を見ていると、これもひとつの尊い「Mastery for Serviceだ」と思います。私にとっては、それはまさに「足を洗い合う」ことのとても具体的な証です。

繰り返しになりますが、「Mastery for Service」というとき、努力してがんばって色んなものを得て社会に仕える人になるということももちろん大切なのですが、同時にうまくいかないことやしんどいこと、傷つく体験、喪失の体験、それらすべてを含めて「Mastery」、それが誰かのために何かのためになることがある、それを忘れずにいてほしいと願います。そう考えられたら、希望があるのではないのでしょうか。スクールモットーが、ぐっと身近なものになるのではないのでしょうか。そんなふうに考えています。

(社会学部教授・宗教主事)